2　宿泊研修

実施日：令和元年８月 21 日（水）から同月 23 日（金）まで
場　所：福島県いわき市、双葉郡（浪江町、広野町）、田村郡三春町
宿　泊：Ｊヴィレッジホテル
● １日目：被災地状況視察、防災士養成講座、講演
● ２日目：浪江町での講演、被災地状況視察、交流活動、防災士養成講座
● ３日目：復興支援ボランティア、宿泊研修の振り返り

● スケジュール

8月21日（水）［1日目］	
8:30	出発
13:00 ～ 15:00	福島県環境創造センター視察
17:00 ～ 18:00	●防災士養成講座［6］　避難と避難行動 福島県いわき市立小名浜第二中学校校長　松本 仁志 氏
18:00 ～ 18:30	●講演　Ｊヴィレッジについて Ｊヴィレッジ　高名 祐介 氏

8月22日（木）［2日目］	
8:45 ～ 11:30	●講演　浪江町の復興 一般社団法人まちづくりなみえ 事務局次長　菅野 孝明 氏 ●被災地状況視察　浪江町
13:30 ～ 15:30	●被災地高校生との交流活動　福島県立ふたば未来学園高等学校
16:00 ～ 17:00	●防災士養成講座［7］　行政の災害対応 双葉地方広域市町村圏 組合消防本部係長　志賀 隆充 氏
18:30 ～ 20:40	●防災士養成講座［8］［9］　避難所の開設と運営～さすけなぶる～ 福島大学うつくしまふくしま未来支援センター 特任教授　天野 和彦 氏

8月23日（金）［3日目］	
8:45 ～ 11:45	●復興支援ボランティア いわき市小名浜　伊藤農園
13:30 ～ 14:30	宿泊研修の振り返り

● １日目：被災地状況視察、防災士養成講座、講演

●被災地状況視察　福島県環境創造センター

放射線や環境問題を身近な視点から理解し、環境の回復と創造への意識を深めることを目的として開設されている「福島県環境創造センター」で、放射線や福島県の環境の現状に関する展示のほか、360 度全球型シアターなどを見学し、原子力災害からの復興の歩みや放射線、福島県の環境について学びました。

また、放射線測定器（GM サーベイメーター）を用いて、食塩や岩石などをサンプルとして放射線測定を体験しました。

●防災士養成講座［6］
避難と避難行動

福島県いわき市立小名浜
第二中学校
校長　**松本 仁志 氏**

松本仁志氏からは、いわき市立湯本第二中学校の教頭当時、避難所となった勤務校で大勢の避難者を受け入れた際の経験や教訓を基に、「避難と避難行動」と題する講義をいただきました。

災害時に避難所を円滑に運営していくための心構えやコツ、平時からどのように備えておくべきかなど、防災士として心掛けておかなければならない内容を多く学ぶ講義となりました。

（松本氏のお話より）

地震直後は、どうなるか全く予想ができない中、教頭として覚悟を決めて学校（避難所）に残る決心をしました。教頭として職員へ出した最初の指示は、生徒の安否確認でした。これは教育委員会も機能していない中、校長と相談して決めた判断でした。当日の午後９時に、体育館に避難所が開設され、10 人程度が避難してきました。ところが、13 日には壊滅地域の 300 人が避難してくることになり、私と校長の二人では対応ができないので、用務員も含め先生方全員を招集しました。まず、駐車場と受付を設置し、また、避難された方々に節水への協力を求めるルールを作りました。

それから、避難所で決めたことは、避難所の代表でした。地域の知識や人脈の豊富な元校長にお願いしました。生徒会運営のノウハウを生かして、各部屋長を決めて自治の運営体制を構築しました。部屋ごとに名前だけでなく職業も書いてもらって、役割決めの参考にしました。避難所でも得意な分野を生かした役割を担っていただき、役割を分け合い、豊かなきずなを作ることを心掛けました。それらが機能したことにより、避難所の運営が円滑になりました。ちなみに自校の生徒で編成した松本隊は、高齢者を支援する役割を担いました。

次のことを本講義のまとめとします。

1　「もし○○だったらどうする？」と問題意識をもちながら日常を送ること
2　災害のとき、何が課題になっているか把握するため、テレビや新聞等から情報を収集すること
3　「防災ノート～災害と安全～」（東京都教育委員会）や気象庁などのホームページを活用して、「いざというときの対処法」について学んでおくこと
4　避難所開設で大切なこと
- 被災された方々に、避難所を出た後に自立できるだけの体力と精神的な強さもってもらうよう運営すること
- 自治組織を結成すること（一人一役、甘えは許されない。）
- 部屋長会議を実施すること（情報の共有、その日の目標の設定）
- 被災された方々の文化を大切にすること（お彼岸時に仏壇の設置等）
- 楽しく心和む避難所にすること（避難所でも卒業式、誕生会）

5　臨機応変に対応する力をもつこと
6　地域とのつながりを大切にすること

●講演
Ｊヴィレッジについて

Ｊヴィレッジホテル
高名 祐介 氏

宿泊先である、Ｊヴィレッジ広報担当の高名祐介氏からは、当該施設の概要について講演していただきました。

震災前後の施設の画像を映しながら、震災前の状況、地震直後から福島第一原子力発電所の事故対応の前線基地となった状況、再開を遂げた現在ではＪヴィレッジが震災の復興シンボルとしても位置付けられている状況等について、説明いただきました。

講義を聞いた参加者は、この宿泊研修でＪヴィレッジに宿泊する意義について、考えを巡らせている様子でした。

（高名氏の話より）

Ｊヴィレッジの施設の正式名称は「ナショナルトレーニングセンター　Ｊヴィレッジ」と言います。震災前に日本で初めてのサッカーナショナルトレーニングセンターとして整備された場所で、楢葉町、広野町の二つの町にまたがって設置されました。

東京から 200 キロメートル、福島第一原発から 20 キロメートルに位置しています。Ｊヴィレッジは、原発対策の前線基地となりましたが、2019 年４月にグランドオープンして復活を遂げました。復興のシンボルとして位置付けられ、期待されています。

１日目に学んだこと、考えたこと

福島県環境創造センター視察

ここに見学に行っていなかったら、放射線数値についてずっと知らないままであり、福島がまだ危ないと感じたままであった。	生徒
見学して福島の安全への取組を学ぶことができた。この取組を知り、福島の安全にはいろいろな人の苦労や思いやりなどの裏付けがあることを学んだ。福島の人の苦労や思いやりを感じながら福島の農作物を食べたい。	生徒
福島だけの問題ではない。当時の風向が違っていたら東京にも影響していた。他人事で応援するのではなく、自分のこととして取り組む必要がある。	生徒
放射能のことを皆に理解してもらい、福島のほどんどの場所では放射能による心配はないことを広めていきたい。	生徒
高校生が、自然放射線測定体験や展示などを通して放射線について知ることは、原発事故やその影響について正しく理解することにつながる。これからも、多くの高校生に訪れてほしいと思える場所であった。	教員

防災士養成講座［6］

松本先生だけでなく、多くの講師が「地域とのつながり」について語っていた。それだけ、災害時には重要であることを感じた。	生徒
「察する心」という言葉が特に心に残った。どんな状況でも相手の心を察して行動に移す。これは日常生活においても活用できると感じた。	生徒
１年生の時に経験した宿泊防災訓練で、備蓄品の位置などを把握した。もし、学校が避難所になった時に協力したい。	生徒
松本先生がいた避難所は、講義を聞く前に知っていた避難所のイメージとは全く異なった。自分たちの住む東京での避難所設営は、そことは事情が異なるように思える。それは人の多さであったり、規模が違うからだ。そんな中で、もし自分の町だったらどうするか、どう運営するのか考える必要がある。それが、松本先生が話していた「常に問題意識をもつ」ということであろう。	生徒
災害や不測の事態に直面したとき、教育公務員としてどのように行動すべきかを考えさせる、非常に示唆に富んだ内容であった。避難所をどのように運営していくかということが具体的なイメージとして描けるようになった。	教員